

54の国から構成されているアフリカ大陸。

日本からその広大な大地に足を運んだことがある人は
一体どのくらいいるだろうか。

一般的には、貧困、紛争、飢餓といったイメージが先行しがちだが
実は、天然資源や人材の宝庫として注目を浴びているこの地域。

JICAもその可能性を成長につなげるべく
包括的な支援を展開中だ。

アフリカ

国 数：54カ国
面 積：3,026万km²(世界の22.2%)
人 口：10億3,100万人(2010年)
人口増加率：2.1%(2005-10年)
経済成長率：5.5%(2002-10年平均)
日本への輸出品：原油、自動車、白金、
タコ、鉄鉱石など
日本からの輸入品：自動車、トラック、タンカー、
自動車部品、エンジンなど

(出典)外務省ホームページ、African Economic Outlookほか

特集 アフリカ

希望と発展の大陸

アフリカ開発会議 (TICAD) の歩み

<Tokyo International Conference on African Development>

TICAD I (東京) 1993年10月

参加国 アフリカ48カ国、その他12カ国、国際機関など。

成果 「アフリカ開発に関する東京宣言」を採択。「アフリカ開発は国際社会が取り組むべき優先課題」として合意。

TICAD II (東京) 1998年10月

参加国 アフリカ51カ国、その他29カ国、国際機関、NGOなど。

成果 「東京行動計画」を採択。社会開発、経済開発、良い統治・紛争予防と紛争後の開発の政策が提示された。

TICAD III (東京) 2003年9月

参加国 アフリカ50カ国、その他39カ国、国際機関47機関、NGOなど。

成果 「TICAD10周年宣言」と「TICAD議長サマリー」を採択。平和の定着、人間中心の開発、経済成長を通じた貧困削減が提示された。

TICAD IV (横浜) 2000年5月

参加国 アフリカ51カ国、その他34カ国、国際機関74機関、NGOなど。

成果 「横浜宣言」を採択。インフラ開発、農業開発、貿易・投資、観光の促進、産業開発、人材育成などに注目。5年間のアフリカ支援ロードマップ「横浜行動計画」を発表。



TICAD IVで一堂に会したアフリカ諸国の首脳と各国ドナーの代表者

TICAD V (横浜) 2013年6月

参加国 「成長の加速化」に焦点を当て、アフリカの成長の原動力となる民間セクターの投資促進に向けた取り組みなどを議論する予定。

**TICAD Vに向けて
みんなで考える未来**

世界的な不況が続く中、その解決の糸口として国際社会から注目が集まっているアフリカの可能性。08年に開催されたTICAD IV以降、TICADもアフリカへの民間投資を後押しすべ

く、投資環境整備に向けてのインフラ開発（12ページに関連記事）を強化。アフリカへの事業展開に関心を寄せる日本企業への情報提供、BOPピジネスとの連携（8ページに関連記事）など支援の幅を広げている。

そして次のTICAD Vの開催まで1年となった今年の5月5～6日、モロッコのマラケシュで「第4回TICAD閣僚級フォローアップ会合」が開催された。これは09年から年1回、TICAD IVで出された「横浜行動計画」の進捗を確認する場として設けられている会合。日本がTICAD IVで公約した「対アフリカODAを18億ドルに倍増」、「アフリカ向け民間投

資を34億ドルに倍増」という目標が順調に達成されていることが確認されたほか、TICAD Vではアフリカの包括的かつ持続可能な成長の実現に向けて、「成長の加速化」をキーワードに議論を進めることで合意された。

今、まさに激動の渦の中にあるアフリカ。その未知なる可能性を確実に成長につなげられるよう、従来から直面している紛争や飢饉、感染症、低就学率など、いまだ人々の生活の脅威として存在する課題解決に向けた取り組みも同時に進められている。

アフリカの成長の先にある未来！。そこには、すべての人に恩恵が行き渡る発展の姿があるはずだ。

しかし数々の苦難を経て、アフリカは今、大きく変わりつつある。この10年、経済成長率は平均5%を超えるほどまでに上昇。極めて順調な成長を遂げている。その「発展」を支える要

日本との関係はどうだろうか。明らかに地理的には遠いアフリカだが、日本との協力の歴史は半世紀以上にさかのぼる。TICADは60年代から青年海外協力隊の派遣を皮切りに対アフリカ支援を開始。日本の戦後復興の経験と独自の技術力を生かし、技術協力、有償資金協力、無償資金協力を通じて、農業、保健、教育、インフラ整備などの分野で協力を続けてきた。

また90年代、国際社会のアフリカ支援に新風を吹き込んだのも日本だ。東西冷戦時に「援助合戦」の対象となったアフリカに対して、旧ソビエト連邦の崩壊後、国際社会の関心が

急速に低下。援助疲れとも呼ばれたこの現象を打開すべく、日本のイニシアチブの下、93年に東京で「第1回アフリカ開発会議（TICAD）」が開催された。以降5年に一度、アフリカの「オーナーシップ（主体性）」と国際社会の「パートナーシップ（協調）」に重点を置き、アフリカ諸国に加え、国際機関や主要国のドナー、NGOなどを交えて、アフリカ支援の在り方を日本国内で議論している。

そのつながりは、国際協力の世界だけでない。2010年に南アフリカで開催されたFIFAワールドカップをきっかけに、開催地であるアフリカを身近に感じ始めた人も少なくないはず。さらに、あなたの手元にある携帯

飛行機を乗り継いで約1日。日本から西へ、西へと進むと、広大なアフリカ大陸にたどり着く。アフリカ、と一言でいっても、その姿は多種多様。54の国から成る大陸に目を向けると、その多様性が秘める可能性は無限大だ。

人類発祥の地とされながらその後開拓が進まず、「暗黒大陸」と呼ばれていた時代もあったアフリカ。ヨーロッパによる長年の支配を経て、彼らが独立への道を歩み始めたのは1960年代。これを機に国際社会の支援も始まり、アフリカの人々の生活にも「希望」の光がさし込むように。平和で安定した社会の実現に向けて、新たな国づくりが始まった。

とはいえ、その先にある道は、そう容易なものではなかった。独立後もあちらこちらで勃発する内戦、大飢饉による食料不足や飢餓問題、HIV/AIDS、マラリア、結核などの感染症に翻弄される日々。いわゆる「アフリカ」のイメージが、確かに、この時代にはあった。

素の一つが天然資源。そう、アフリカの大地には、石炭や石油、鉄鉱石、レアメタル（希少金属）など、数多くの貴重な資源が眠っている。近年は先進国のみならず、成長著しい新興国からの需要が急増したことから、アフリカ経済が一気に向上に。また、長年この大陸を苦しめてきた紛争が多くの国で終結に向かい、治安が安定し始めたことも成長を後押しした。アフリカ大陸一丸となってさらにチャンスを広げようと、経済回廊の整備などを通じて域内統合も進んでいる。

つながり合うアフリカと日本

急速に低下。援助疲れとも呼ばれたこの現象を打開すべく、日本のイニシアチブの下、93年に東京で「第1回アフリカ開発会議（TICAD）」が開催された。以降5年に一度、アフリカの「オーナーシップ（主体性）」と国際社会の「パートナーシップ（協調）」に重点を置き、アフリカ諸国に加え、国際機関や主要国のドナー、NGOなどを交えて、アフリカ支援の在り方を日本国内で議論している。



出典：African Economic Outlook (推定値、予測値を含む)